

ドクターNAKAMURAの 健康道場



Vol.19 旧石器時代 の食糧確保

今は昔、旧石器時代。皆で競って知恵を出し比べていた時代である。ナウマンゾウが肉食恐竜のように自分たちを襲ってこないことを学習した祖先たちはこぞって新しい武器作りに奮闘した。ナウマンゾウがぬかるみに足を取られて動けなくなるのを待っていたのではなかなか肉にありつけない。ナウマンゾウを見つけたら追い込んで仕留めるのだ。その為には一発で仕留める武器が必要だ。自分が考案した武器で仕留めることができれば、最初に欲しいところの肉を手にする権利を与えられる。祖先たちはありったけの知恵をふり絞って考えた。「これどうやって使うん。」というような目が点になるような滑稽なものを作ってくる輩もいる。欲の始まりである。下手な鉄砲数撃ちゃ当たる的発想だ。そんな中、鋭い槍を作ってきた奴がいる。なるほど確かに急所に当たれば一撃

で仕留められそうだ。大風で木がたわむのを見て木の反跳力を使って槍を飛ばすことを考えた輩もいる。アイデアは悪くはないが、当たるも八卦、当たらぬも八卦、ブービー賞かな。ただ、弓矢へと道標をつけた功績は大きい。試行錯誤を繰り返しながらいろいろ考えた。

ある時、食べられないほどのナウマンゾウの肉を手にした。次にいつ御馳走にありつけるか分からない。ためしにひとかけらずつ洞窟の風通しのいいところと、海の中に保管することにした。食べ残した顎骨をフック状に削って肉をひっかけ水の中につけておいた。洞窟の方は上手く干し肉ができた。保存食の始まりである。海につけておいた肉を引き上げようとしたが、何か重い。一瞬、つけておいた肉がなくなったかと焦ったが、何と肉の代わりに大きな魚が上がってきた。フックにかかったのだ。漁業の始まりである。

一体、このような遺伝子のルーツが本当に糖尿病の解決につながるのだろうか？私は疑心暗鬼になりながらも和尚の説法をはるか遠くに聞き健康道場で座禅を組み続けている。本質的な糖尿病の解決を目指して。

そよかぜ 循環器内科・糖尿病内科
(県立中央病院 前)

院長 中村陽一